



TITLE:

アリブカの亂について: モンゴル帝國から元朝へ (羽田先生追悼號)

AUTHOR(S):

田村, 實造

CITATION:

田村, 實造. アリブカの亂について: モンゴル帝國から元朝へ (羽田先生追悼號). 東洋史研究 1955, 14(3): 171-186

ISSUE DATE:

1955-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/139051>

RIGHT:

東洋史研究

第十四卷 第三號 昭和三十年十一月發行

アリブカの亂について

——モンゴル帝國から元朝へ——

田 村 實 造

は し が き

これまでもいったことであるが、北アジア世界に興った遊牧系ないし狩獵系諸族の國家をみると、だいたい、つぎのような二つの國家類型にわかれたれると思う。その一つは、匈奴・鮮卑・柔然(蠕蠕)・突厥・回鶻などの諸族によって建てられた同名の遊牧的部族國家であり、他は、タクバツ族の北魏・キタイ族の遼・女眞族の金・モンゴル族の元・マンシウ族の清などのような一連の中國征服王朝である。これらは同じ遊牧系部族——なかには狩獵牧畜系のものもあるが——でありながら、なぜこのように異なる型の國家を建設したのか、ということについては、近い機會に改めて論じるつもりであるから、いまは、この點には深く立ち入らないことにするが、これらの國家群のうち、モンゴル族は、同一民族で以上の二つの國家類型、すなわち遊牧國家から征服國家へと、二段とびの變容をとげているという點で、他の北族諸國家とはやや異った經歷をもつものといえよう。

周知のように、モンゴル族は、一三世紀はじめ太祖チンギス・カーンにひきいられて、史上に比類のない大遊牧帝國をうち建てたが、やがてその世紀のなかばから、かれらは東方においては元朝、西方にあっては伊兒汗國イル・カーンなどという征服國家を建設した。ことに中國征服王朝としての元朝は、その後長くモンゴル族の宗家として、またその皇帝は全モンゴルに君臨したのであった。すなわち、北アジア世界に興亡した諸民族のうちで、同一民族でありながら遊牧國家から征服國家へと、このようにあざやかな轉身をとげたのは、モンゴル族だけだといってよからう。本稿は、モンゴル族のこのような國家的變容を背景におきつつ、その過程において起った「アリブカの亂」の歴史的意義を考えてみたものである。

一

結論からさきにいえば、アリブカの亂は、モンゴル族を太祖以來の遊牧的國家から中國征服國家としての元朝へと飛躍させたといふ役割を演じたものと考えてるのであるが、議論をそこまで落ちつかすためには、多くの説明が必要である。

さて、モンゴル族が遊牧國家のモンゴル帝國から征服國家の元朝に轉身したということは、いいかえれば、かれらの國家の重心を、漠北のモンゴリア本地から華北に移動したこと、その政治的・經濟的な諸體制を、遊牧制から農耕制にきりかえたということにはかならない。

がららいモンゴル族は、すくなくとも太祖および太宗のはじめごろまでは、中國をあまり問題にしていなかった。太祖は漠北を統一したのは、その晩年を通じて中央アジアの經略經營に専念したため、中國に對しては意を注ぐひまはなく、しぜん國初にあっては、中央アジアがモンゴリアの本地について重要視されていた。中央アジアは第二子チャガタイの封領地であり、それに接する西北モンゴリアは太宗オゴタイの領域であつた關係から、太宗・定宗時代も、いぜん中央アジアはモンゴリアにつぐ重要性をもっていた。

華北がかれらの注意をひきはじめたのは、太宗六年（1234）金國が亡んで、漠地一帯（華北）がモンゴル的手中におち

てからのことという。すなわち、翌七年から八年にかけて、太宗は全漢地の戸口調査を行い（乙未年籍）、これを諸王・功臣らに分封して、漢地に一應かれらなりの封建制をしいたが、これが、いわゆる五戸絲戸の制とよばれるものである。しかし、この制も太宗はじめモンゴル政治家たちが、中國の眞價をみとめた上で施行されたものではなく、それは太宗と契丹人政治家耶律楚材との妥協によって成立したものであった。つぎに引く元史定宗紀の記載からでも知られるように、モンゴルの諸王貴族たちにとっては、漢地・漢人は、ただ搾取か高利貸的利潤の對象にすぎなかったようである。

諸王および各部また使を燕京以南の諸郡に遣わして、貨財・弓矢・鞍轡などの物資を徵求し、中略駙騎絡繹として晝夜たえず、民力ますます困る

さらにひどいのは、よくひきあいに出されるように、モンゴル人のうちには、漢地を牧地化しようとする暴言を吐くものさえあった。そのような、かれらの無理解な支配から、ともかく一應漢地・漢人を救ったのは、なんといっても耶律楚材の献身的努力のためものであった。

ところが、定宗について第四代の憲宗が立ち、モンゴル帝國の大汗位が、太宗オゴタイ・カーンの系統からその弟睿宗ツルイの系統に移ると、ツルイ家の領地は、カラコルムを中心とする地方であり——ルブルックによれば、ツルイの本領をうけた末子アリブカは、その母とともにカラコルムに近い帳殿に住したという（Rockhill 譯註 Rubruck 紀行 p. 222—3）。しかし、モンゴル本地のすべてがツルイ家の領地であったのではない。ツルイは、かつて太祖の死後、一旦は太祖の本領であるモンゴル本地をひきついだが、太宗オゴタイが汗位をつぐと、その民をあげて太宗に交附している——當時カラコルムをはじめオノン・ケレン地方への食糧およびその他の諸物資は、多く漢地（華北）に補給を仰いでいた關係上、かれらは漢地の經濟的價値を、西方に本領をもつオゴタイ・カーン家やチャガタイ・カーン家の人びとよりかは、はるかに高く評價していたであろう。憲宗は即位すると、中央集權の強化をねらって、東・西トルキスタン、イラン、華北にそれぞれ別失八里等處行尙書省、阿母河等處行尙書省、燕京等處行尙書省などを新設したが、とくに漢地に對しては、

弟のクビライを大總督に任じて、經營の大任を委托しているのは（憲宗元年）、憲宗ならびにその當局者たちに、漢地が中央アジアにくらべ、はるかに重要視されるにいたったことを語るものであろう。

こうして、憲宗から漢地の經營をゆだねられたクビライは、漢人のもつすぐれた政治的・經濟的手腕、廣い知識、高い教養、あるいはその土地の豊饒などを親しく知見するにしたい、いよいよ漢地の統治に本腰を入れることになった。

それゆえ、同じく中國を重視するようになったといつても、憲宗とクビライとの間にも大きなちがいが存するわけである。憲宗にしてみれば、中國を重視するといつても、やはり和林カラムのあるモンゴリアがあくまで本地であり、したがって漢地は、

宗室のいわば植民地にすぎなかった。かれがクビライに、一たび漢地經營の全權をゆだねながらも、元史姚樞傳卷一や譚澄傳卷一にみえるように、³⁾強大な兵權をにぎるクビライが、京兆を中心に封地の陝關一帶に寛大な政治をしき、漢人の人心をえつつあるとの讒言を聞くと——元史卷一五九趙良弼傳によると、これは阿藍答兒が讒したものである——ただちに

阿藍答兒や劉太平らを派遣して、關中・河南の財賦を會計し、きびしい收奪を行わせたという事實などは、漢地に對する憲宗の態度が、善政を布くというよりも收奪を主とする方で、やはりまだ植民地的評價を出なかつたことがうかがわれるであらう。

これに對してクビライは、收奪よりも漢人の民心をうることに意を傾けていた。かれにとっては、モンゴル本地よりもむしろ漢地、カラコルムよりもむしろ京兆・燕京がよりどころであつた。しかし、このような漢地に對する評價のくいちがひも、憲宗とクビライとの間では、まだ對立にまでは具體化しなかつた。さきにのべたような憲宗のしうちに對しても、クビライが姚樞の忠告を納れて漢北にかえり、直接憲宗と會見することによって、兄弟のわたかまりは、たちまち氷解したといわれる。ところが、憲宗の死後クビライとアリブカとなると、俄然對立抗争となつて表面化してきた。すなわち、はじめ太祖・太宗・定宗ごろは、モンゴリア本地に對する西域・漢地という關係にあつたものが、やがて憲宗のときには、モンゴリア本地と漢地との相互關係にかわり、ついに世祖クビライ・カーンになると、中國に據つてモンゴリア本地と西

域をおさえるという關係にまでかわったのである。この關係を轉機づけたのがアリブカの亂であつた。したがって、いまみたようなモンゴル族のモンゴリア本地・中央アジア・漢地に對する評價の、歴史的推移を背景においてアリブカの亂を考えてみると、この亂のもつ意味が、一段とはっきりするであらう。

二

アリブカの亂をのべるにあたつては、まずアリブカその人の身上から洗つてかかる必要がある。アリブカは、モンゴル帝國第四代憲宗マングおよび元朝の世祖クビライの弟で、太祖チンギス・カーンの子拖雷（睿宗）の末子（第七子）にあたる。モンゴル族の習慣として、末子は父の家産をつぐことになっているため、アリブカも父ツルイの死後はその後をうけ、さきに引用したルブルックの紀行にもあるように、母（ツルイの未亡人唆魯忽帖塔尼）とともに、カラコルムに近いアルタン河畔の帳殿に住んでいた。

ツルイの後をうけたというので、アリブカの待遇が宗室中でも特別に厚かつたことは、たとえば太宗朝に、かれのうけた分民をみて、中央アジアのボハラ市の三、〇〇〇戸（初年）、河南省・陝西省の四〇、〇〇〇戸（四年）、眞定路の八〇、〇〇〇戸（八年）など他の諸王にくらべて斷然多い。眞定路といへば、當時漢地の第一等地にあたる。しぜん、かれはモンゴル帝國の宗室中でも重きをなし、憲宗は南宋經略に出征中、アリブカを留守として、カラコルムの本地を守らしめている。

このため一二五九年七月、憲宗が中國南征中——蜀の合州城攻圍戰中——に急死すると、ちょうど太祖の死後、ツルイが監國として、ケルレン河のケデックアラル（川中島）にクリルタイを開催し、太宗オゴタイ・カーンを推戴したように、その後繼者第五代のモンゴル大汗を決定すべきクリルタイは、留守アリブカによって召集されるのが當然のことであつた。また、その候補者としては、クビライ、アリブカあるいは憲宗の諸子が一應あげられるであらう。

ところが、さきにも一言したように、漢地の統治をめぐるクビライ派とアリブカ派との対立は、モンゴルの宗室をあげてのクリルタイを開くことを不可能にした。アリブカをめぐる人びと、すなわちアリブカ派には、憲宗の在位中から、クビライの華化方針——漢地重視・漢人重用主義を疾視し不満をいだく、阿藍荅兒・渾都海・脫里赤らをはじめとする憲宗側近の諸臣が多く、かれらは憲宗の死後クビライをおさえるため、アリブカを擁立すべく畫策したのであった。

クリルタイにおいて發言を強化するためには、なによりも實力のうらづけが必要であった。かつて憲宗が武力を背景にして大汗位を太宗系から奪って以來、この傾向はとくに顯著になった。そこでアリブカ派は、クビライに先手を打ってクリルタイ召集の實力を固めるため、まず漠北諸郡と漠南諸州とから軍隊を徵發しはじめ、同時に燕京の確保を企圖した。當時燕京には、天下の財賦をにぎる燕京等處行尙書省が置かれ、漢地統治の根本の地であった。元史世祖紀によると、憲宗の死んだ年（1259）の十一月己未の條に

ときに先朝の諸臣、阿藍荅兒・渾都海・脫火思・脫里赤らが、アリブカを立てようと謀った。そこで阿藍荅兒は漠北諸郡に兵を徵し、脫里赤は漠南諸州に軍隊を徵發した。そのうちに阿藍荅兒は開平内蒙古ドロン・ノール附近、クビライの根據地の近くまで徵兵にきたので、開平に留守していた世祖の皇后は、徵兵は國の大事である。太祖の曾孫にある眞金の長子クビライがここに在るのに、なぜこのことを通報しないのか、といわしめたところ、これに對して阿藍荅兒は答えることができなかった。ついで脫里赤もまた、燕京（兵を徵發し）にやってきた。そこで皇后は、使を南征中の世祖に遣わして、すみやかに歸還せんことを請うた

とみえ、同じく閏十一月己丑の條に

脫里赤が民を徵兵しようとしたので、人民ははなはだ苦しんだ。クビライが（南征から歸還して）そのわけを詰問したところ、（脫里赤は）憲宗の遺命にしたがって行うものであると答えたので、クビライは、かれら（アリブカ派）が禍心をもっていることを推察し、脫里赤が徵集した兵を解散した。そこで人心は大いによろこんだ

と傳えられているのは、アリブカ派が兵力の増強に北奔南走していたことがうかがわれる。

また郝經傳に「阿里不哥已行赦令、令脫里赤爲斷事官行尙書省、據燕都按圖籍、號令諸道、行皇帝事矣」などとあるのは、燕京の確保をねらったものである。燕京はフビライ派にも、アリブカ派にも重要なところであるが、わけてもカラコルムに據るアリブカ派にとっては、この地は、モンゴリア本地に必需物資を補給する基地として、必要かくべからざる要地であった。こうして憲宗の死をきっかけに、俄然對立を露呈した憲宗派^{II}アリブカ派（モンゴル本地派）とクビライ派（漢地派）とは、燕京の掌握をめぐる火花を發しはじめたのである。

アリブカ派の畫策に對するクビライの打った應手を、元史世祖紀によつてみると

憲宗とともに南征中であつたクビライは、アリブカに自立の野望があると聞くと、宋と和を結んで、その年閏十一月二十日燕京に歸つてアリブカ派の脫里赤の工作を封じて、これを失敗に終らせ、アリブカに先んじて翌年（1260）三月開平に、（おでもりの）クリルタイを開いて、みずから皇帝の位に即いた。同じ日前朝の燕京行台・燕京等處行尙書省に代つて燕京路宣慰司を新設し、禡禡・趙璧・董文炳にその執行を命じている

これに關してドーソンの蒙古史には、ペルシア側の Rashid の Djami ut-Tévarikh や Mailla の Histoire generale de la Chine を引く

一二〇六年一月、クビライは Yan-tou 燕都（pé-king 北京）城下に本營を定め、アリブカに對して、なぜ人馬金錢の徵發をしたかを詰問したところ、かれからはきわめて平和的な保證をえた。アリブカは Altai 山脈地方にカラコルム附近のアルタン河の誤の憲宗の大オルダにクリルタイを召集し、その葬儀を行うにあつて、クビライおよびその一黨にも來會するよう要請した。こうしてアリブカの使者ドリチ（脫里赤）はクビライ以下の宗族諸王を説いて北方に歸らしめようとした。（これに對し）クビライは、クリルタイに列席するにさきだち、その幕營地に部下の將士を集合しなければならぬと答えた。ドリチは、この返事をアリブカに傳達して、なおクビライのそばにとどまったが、クビライは四月

に、新帝の推選地である開平府に赴いた弟のムケ（木哥＝穆哥）・太宗の子カダン（合丹）・ウチュゲン・ノヤン（斡惕赤斤那顔）の子トガチャル（塔察兒）をはじめとする左翼の諸王諸將が、相會してクリルタイを開き、たまたまペルシア出征中の諸王フラীগも、デューチ、チャガタイの子孫も遠方にあつて不在のため召集することができなかったが、しかも形勢は重大で、一刻も猶豫しがたかったので、満場一致でクビライを推選し、定例の儀式によって即位式を行った（六月四日）。ときにクビライは四四才であつた。（D'Ohsson; Histoire des Mongols. II, 344—5）

とみえるが、これによるとアリブカは、憲宗の葬儀を營むためカラコルム附近の憲宗の帳殿にクリルタイを召集する手はずになつていたようである。このクリルタイが開かれれば、その席上でつぎの可汗の選定も協議されることはあきらかであつたから、クビライはそれに先手を打って、開平に自派の諸王・貴族・漢人を召集してクリルタイを開き即位したのである。したがつて箭内博士も指摘されているように（蒙古の國會即ちクリルタイに就いて、蒙古史研究、四三五頁）、世祖の開いたクリルタイは、かれの實力をたのんで獨斷專行したもので、モンゴル族の慣習上からすれば、それは違法のものであるといふほかないであらう。

世祖の即位に對して、アリブカもただちに（四月）カラコルム附近のアルタン河畔にクリルタイを召集して、即位を宣言している。いま引いたドーソンの蒙古史に、Altai 地方の Mangu（憲宗）の大帳殿^云とあるのは、おもうにこのアルタン（Altan）河地方の誤りであらう。ここにおいて、モンゴルの大汗位をめぐつて、ツルイ家の兄弟であるクビライとアリブカとが相争うことになった。そして、この兄弟を擁立するモンゴルの宗室・貴族たちも、それぞれ漢地派（クビライ派）・モンゴル本地派（アリブカ派）の兩黨派に分れて抗争することになった。

そのうちクビライ派についてみると、元史世祖紀に「親王合丹・阿只吉率西道諸王、塔察兒・也先哥・忽剌忽兒・爪都率東道諸王皆來會、與諸大臣勸進」といい、またさきに引用したドーソンの蒙古史にも、世祖の異母弟の木哥・太宗の子合丹・チャガタイの曾孫阿只吉・阿卜失哈および太祖の弟オチギン・ノヤンの子塔察兒らの名をあげている。そのほか

燕帖木兒・忙古帶・八春・王文統・汪良臣・廉希憲・南挺・姚樞などの蒙・漢の大臣もあり、しかもペルシア駐屯中の親弟フラグをはじめジュチ、チャガタイの子孫のうちにも、はるかにクビライに聲援を送るものがすくなく、はじめから力の比重は、クビライ派に傾いていたようである。

一方アリブカ派をみると、憲宗の諸子阿速歹・玉龍答失・昔里吉をはじめ、太宗の孫海都・禾忽・チャガタイの孫阿魯忽・フラグの子出木哈らの諸王の名がみえ、宗室は父子・兄弟・孫子が互に敵味方にわかれて相争うというありさまであった。また大官權臣としては、元史世祖紀に

ときに先朝の諸臣、阿藍答兒・渾都海・脫火思・脫里赤ら相はかつてアリブカを立つ

というように、阿藍答兒・渾都海・脫火思・脫里赤・哈刺不花・不魯花(字魯歡)・明里火者・怯的(乞帶)不花・劉太平・霍魯懷・忽察忒滿・阿里察・脫忽思らの舊憲宗派が中心勢力をなしていた。

なかでも阿藍答兒は、註(3)に引用した姚樞傳・潭澄傳にもみえるように、かつて憲宗の命をうけてクビライの分封地京兆および河南の財賦を會計し、その腹臣である漢人官吏に對し苛烈な處刑を行ったことがある。これについては、元史卷一五九趙良弼傳にも

阿藍答兒は、世祖の英武であることをはばかり憲宗に讒した。そこで憲宗は、ついに阿藍答兒を陝西省左丞相に、劉太平を參知政事に任じて、京兆の錢穀を鈎校させた。その結果、煨煉群獄して死ぬもの二十餘人、衆はみな、おののきおそれた

とみえるが、このようなかれの行動は、ただ憲宗の命によるというばかりでなく、クビライの漢地・漢人政策に對する烈しい反感によるものといえよう。姚樞傳に「世祖聞之不樂」とあるところから推しても、これ以來かれとクビライとの仲は、決して和解されなかったであろう。阿藍答兒は、その後憲宗の南征中は、カラコルムの留守アリブカの輔佐役となつて漠北にとまっていたから、クビライとの關係が硬化するに反比例して、アリブカとの間柄は、いよいよ親密さを加え

ていったものとみななければならず、かれがアリブカ擁立の最も熱心な主唱者の一人であったことも、うなづけるであろう。脱里赤も、当初から阿藍荅兒に劣らぬ熱心なアリブカ支持者である。さきにも引いたように、かれは憲宗の死後ただちにアリブカの委托をうけ、燕京の長官として派遣されたが、やがてクビライによって留置された。ドーンソンによれば、かれは一度は脱走を企てたが、たちまち捕えられて拷問に附され、ついに憲宗の死後におけるアリブカ派の陰謀を自白したので禁錮されたという。(D'Ohsson; Histoire des Mongols. II. 346)

渾都海は憲宗の命をうけ、騎兵二萬に將として六盤山の要地に駐在していたが、憲宗の死に乗じて關右の劉太平らと相應じて兵をあげ(中統元年六月)、各地の諸將によびかけて來援を求めた。太平らが誅に伏したのちは、さらに阿藍荅兒の軍と合して西涼府甘肅省永昌路に據ったが、同年九月、合丹・汪良臣らの軍と戦つて敗死した。

劉太平は、かつて阿藍荅兒とともに京兆の財賦會計にたずさわったが、その後もこの地にとどまって陝西省事を行つていた元史卷一五 九趙良弼傳。もちろんクビライとの仲はよからうはずはなく、憲宗が死ぬとひそかに關中據有の野望をいだき、霍魯

海とともに關右の諸將を連ねて渾都海と結び、はるかにアリブカに呼應して反を謀ったが、元史世祖紀に「中統元年六月、劉太平等謀反、事覺伏誅」とあるように、やがて世祖の命をうけた廉希憲によって、誅殺されてしまった。このとき、乞帶不花・明里火者とともに誅せられている。

哈刺不花は渾都海の副將であつたが、阿藍荅兒・渾都海が甘州の戦で敗死したのちは、アリブカ側の主將として活躍している。とくにかれは、西方においてチャガタイ汗國の宗主阿魯忽や定宗の子禾忽らと激戦を交えたが、のちボカラ城の戦で敗死した。

不魯花は字魯歡とも書かれるが、睿宗・憲宗に仕えた重臣である。元史卷一三四也先不花傳によれば

幼にして睿宗に仕えて宿衛に入り、憲宗の即位にあたっては蒙哥撒兒と謀議にあずかり、のち中書右丞相を拜し國政を專らにした

という。かれは最後までアリブカの謀臣として活躍したが、ついに力盡きて來歸すると、罪を問われて誅に伏した。元史紀
 そのほかオゴタイ系の有力者海都も、最後までアリブカを應援し、アリブカ降伏後は、西北諸王を率いて長年にわたり元朝に反抗をつづけた。

以上によってみると、クリルタイの召集・大汗位の要求という點では、モンゴルの慣例上アリブカの方がクビライよりもより正統性が高く、かつクビライの漢地重心策には、モンゴル族の諸王・權臣たちの多くが不満反感をもっていたため、しぜん數の上からは、多くのモンゴル貴族や重臣たちがアリブカ派に加擔していただようである。ことに可汗の候補者として有力な資格をもつ憲宗の諸子が、こそってアリブカ側に立っていたということは、クビライにとっては名分上はなほだ不利であつたものと考えられる。ただクビライとしては、憲宗の兄弟中もつとも年長者であるという點と、かれが巨大な物的・人的資源をもつ漢地をおさえていること、さらに南征に従つていた強力なモンゴル軍および漢軍を掌握していることが、なによりの強みであつた。クビライ即位の詔にも「今日太祖嫡孫之中、先皇母弟之列、以賢以長止予一人、雖在征伐之間、每存仁愛之念、博施濟衆、實可爲天下主」とみえるが、この文章はもちろん漢臣の手になつたものであるにせよ、よく世祖の自信のほどを示したものだといえよう。

三

前節でいったように、一二六〇年三月この年五月十九日世祖は中統と建元したクビライが漠南の開平にクリルタイを開いて帝位につくと、それに對しアリブカも、翌四月漠北のカラコルム附近にクリルタイを召集して大汗の就任を宣言したため、ここにクビライ、アリブカの兩黨派は、骨肉の争いをひきおこすことになった。

元史世祖紀によると、クビライ・カーンはただちにアリブカ征討の大きかりな戦備に着手している。すなわち四月一日、中央政治機關である中書省を構成するとともに、漢地の治安を確保し、かつ兵站基地としての機能を發揮すため、同日

西北邊區の陝西・四川等路宣撫司が設置され、つづいて五月（二十八日）には燕京路・益都・濟南路・河南路・北京等路・平陽太原路・眞定路・東平路・大名彰德路・西京路・京兆等路などの漢地全域にわたって十路宣撫司を立て、各宣撫使にはクビライ腹心の蒙・漢臣僚を任命した。⁹⁾こうして、各路からしきりに兵を徵集して、燕京・開平・陝西の守備を嚴にしたが、とくに前進根據地としての開平には多くの兵馬を集結し、糧米・兵器・軍服・軍靴などの軍需品を多量に集積している。これらの戦備のありさまを元史によってみると、註(10)に列記したようである。

こうして兩派の戦火は、この年九月、まず西方の甘肅方面において交えられることになった。これよりさき六月、アリブカに呼應して隴右の劉太平らが、六盤山の渾都海と結んで反をはかり、さらに秦蜀各地の諸將とも氣脈を通じたが、廉布憲の機宜をえた處置によって、まもなく誅に伏すと、渾都海は兵をまとめて去り、九月阿藍荅兒の軍と西涼府に合している。はじめ阿藍荅兒はアリブカの命をうけてモンゴル各部に兵を徵したが、九月軍を率いて焉支山から西涼府にいたり、渾都海の軍を併せてこの地に據った。おそらくアリブカ派としては、ここを抑えることによってクビライ側と西方諸王との連絡をたち、同時に甘肅・陝西・四川・雲南方面に對するにらみをもきかす意圖であつたと思われる。

そこでクビライとしては、諸王の合丹・合必赤および汪良臣らの統率の下に大軍を派遣したので、兩軍の激闘が行われることになり、その結果、西涼府附近においてアリブカ派が大敗し、阿藍荅兒と渾都海は斬殺された。¹¹⁾すでに劉太平らを誅し（六月）、ここに宿敵阿藍荅兒を仆して、クビライとしては、西側面の脅威を去って、北方に専念することができるようになったわけである。さきに註(10)に表示したところからもわかるように、開平ならびにその附近一帯におけるクビライの周到な戦備は、その後着々と進められていったが、やがて中統二年十一月、開平の北方、昔木土腦兒シムドノールの一戦で、アリブカに致命的打撃を與えた。この戦は、むしろアリブカの方からしかけたものらしく、兩軍はここで遭遇して血戦し、ついにアリブカが敗れて北方に奔ることになった。¹²⁾この敗戦後、元史世祖紀にも「阿里不哥、自昔木土之敗、不復能軍」というように、アリブカは再び立つて攻勢に轉じるほどの勢力を回復することができず、三年後の至元元年七月、かれは

力つきてクビライのもとに投降するにいたった。

ちなみに、昔本土の戦敗後のアリブカの行動について、ドーソンの蒙古史によれば、アリブカはクビライとの抗争以來、漢地からする漠北への補給がたれたため、この難局を打開すべく西方に食糧その他の物資の補給を求めたようである。

すなわちアリブカは、阿魯忽をチャガタイ汗國王に任命し、これと連携してカラコルム地方への補給を行わせようとしたが、やがて阿魯忽は、かえってクビライ側に立つことになったため、アリブカは西方に兵力を集中して、中統三年から四年にかけ、もっぱら阿魯忽との戦をつづけた。¹³⁾このため西方からの補給も思うにまかせず、しだいに困窮して、ついに翌至元元年七月その黨與をあげて來降することになった。クビライはアリブカ自身の罪はゆるしたが、不魯花以下十人の謀臣たちは誅せられて、前後五年にわたった抗争も、ようやく終止符が打たれたのである。¹⁴⁾

む す び

以上みてきたように、アリブカの亂は、クビライ、アリブカ兄弟を中心とするモンゴル宗家の内紛であり、それは、クビライの漢地重心主義に對し、あくまでもモンゴル本地主義を貫徹こうとする保守派が、憲宗の死をきっかけにアリブカを擁立して抗戦したものである。

クビライの漢地重心主義は、モンゴル帝國の發展上たどるべき必然のコースであつたと考えられるから、そのいみでクビライ派はモンゴル族の歴史を推進すべき役割をになつていたといえよう。五ヶ年にわたつたこの戦は、幸にしてクビライの勝利に終つて征服國家元朝の成立をみたが、これは、その後のモンゴル國家の性格を一變させることになった。

すなわち、それまではチャガタイ、オゴタイ、キプチャックなどの各カーン國は、それぞれモンゴル帝國を構成する一細胞であつたが、元朝の出現を機に、これらの諸カーン國は分離獨立し、元朝はモンゴル宗家といつても名義上だけで、單に一個のクビライ・カーン國にすぎなくなつた。そのためクビライ・カーン國、すなわち元朝の領域内において、これ

までモンゴル諸王たちが世襲してゐた五戸絲戸領主権は消滅してしまった。そしてクビライ・カーン國は、中國に君臨するモンゴル族の征服國家元朝として、他の諸カーン國とは異り、いよいよ中國の體制を整備していったのである。

註

①たとえば、田村、ボヨウ王國の成立と性格（東洋史研究第十一卷二號）参照。

②五戸絲戸の制 乙未年籍と五戸絲戸制については、愛宕松男、蒙古人政權治下の漢地に於ける版籍の問題（羽田・東洋史論叢所收）、安部健夫、元時代の包銀制の考究（東方學報・京都二四冊所收）を参照、

③元史卷一五八姚樞傳によれば

或讒王府（クビライ）得中土心、憲宗遣阿藍荅兒、大爲鉤考、置局關中、以百四十二條推集經略官撫官吏、下及征無遺、曰俟終局日、入此罪者、惟劉黑馬・史天澤以聞、餘悉誅之、世祖聞之不樂

といい、同じく卷一九一潭澄傳にも

時世祖以皇弟開藩京兆、總天下兵、歲丁巳（憲宗七年1257）有間之者、憲宗疑之、遂解兵柄、遣阿藍荅兒往京兆、大集官吏、置計局百四十二條、以考覈之、罪者甚衆、世祖每遣左丞闊闕與（潭）澄、周旋其間、以彌縫其缺、とみえる。世祖本紀には、ただかんたんに

歲丁巳春、憲宗命阿藍荅兒・劉太平會計京兆河南財賦、大加鉤考、其貧不能輸者、帝爲代償之とあるのみである。

④睿宗（拖雷）の諸子 睿宗ツルイの諸子について元史卷一〇七、宗室世系表には

睿宗皇帝十一子、長憲宗皇帝、……次四世祖皇帝、……次六旭烈兀大王、次七阿里不哥大王、次八撥禪大王、……次十一雪別台大王

といつて十一人をかゝげ、阿里不哥を第七子としている。ふつう阿里不哥が末子とか末弟といわれるのは、憲宗・世祖らの同母弟としての末子・末弟の意であらう。

⑤アリブカの召集したクリルタイ開催地 元史世祖紀によれば、アリブカのクリルタイ開催地について

中統元年四月、阿里不哥僭號于和林城西按坦河というが、この和林城西の按坦河とは、すでに箭内博士も考證されているように、アリブカの帳殿のおかれていたオルコン河上流の一小河をさすものであらう（蒙古の國會即ちクリルタイに就いて、蒙古史研究492頁）

⑥渾都海の舉兵 元史卷一二六、廉希憲傳には

渾都海已反、殺所遣使者朶羅台、遣人諭其黨密里火者於成都、乞台不花於青居、使各以兵來援、且約太平・霍魯海、同日俱

發とみえるが、しかしまもなく劉太平・乞台不花・明里火者らは誅に伏した。元史世祖紀には、そのことをつぎのように傳えて

いる。

中統元年六月、劉太平等謀反、事覺伏誅、并誅乞帶(台)不花於東川、明里火者於西川

⑦ 哈刺不花の死について、元史卷一八〇耶律希亮傳には、つぎのように傳えている。

(希亮)至也里虔城、而哈刺不花之兵奄至、希亮又從二王(阿魯忽・禾忽)興師、還至不刺城、與哈刺不花戰敗之、盡殲其衆、二王乃隨其頭、遣使報捷

⑧ 海都の反亂については、箭内互「海都の叛いた年次」(蒙古史研究所收)、愛宕松男「海都の叛いた年次」(京都大學文學部刊二千六百年記念、史學論文集所收)を参照されたい。

⑨ 宣撫使の使命 中堂事記にみえる中統二年四月二十四日附、中書省の奏准にかゝる宣撫司所行條畫によれば、宣撫司は職官の陟黜・租税の檢閲などが、その主な職務として示されている。しかし、中統元年設置當初は、軍官民を兼領し、かつ管下の漢人軍閥世侯をも監視する重要な任務をおびていた。そのため十路の各宣撫使および副使には、いずれも世祖の腹臣が任用されている。

⑩ 世祖のアリパカに對する戰備に關する史料

中統元年五月戊辰朔、詔燕帖木兒・忙古帶節度黃河以西諸軍
乙未、立十路宣撫司○詔平陽京兆兩路宣撫司、僉兵七千人於延安等處守隘○徵諸路兵三萬、駐燕京近地○命諸路市馬萬匹、運開平府○以總帥汪良臣統陝西漢軍、於沿河守隘
同年六月戊戌、詔燕京・西京・北京三路宣撫司、運米十萬石輸開平府及撫州・沙井・靖州・魚兒渾、以備軍儲 壬

子、詔陝西・四川宣撫司八春、節制諸軍 乙卯、詔東平路

萬戶嚴忠濟等發精兵一萬五千人赴開平 乙丑、詔十路宣撫司、造戰襖・裘帽、各以萬計、輸開平

同年七月戊辰、敕燕京・北京・西京・眞定・平陽・大名、

東平・益都等路宣撫司、造羊裘・皮帽・袴靴、皆以萬計、輸開平 丙子、帝自將討阿里不哥、敕劉天麟規措中都析津驛傳馬

同年九月丁卯、帝在轉都兒哥之地 是月阿藍荅兒率兵

至西涼府、與渾都海軍合、詔諸王合丹・合必赤、與總帥汪良臣等率師對之 丙戌、大敗其軍于姑藏、斬阿藍荅兒及渾都海、西土悉平

同年冬十月戊午、車駕駐昔光之地、命給官錢、雇在京糞駝、運米萬石輸行在所

同年十二月乙巳、帝至自和林、駐蹕燕京近郊
中統二年二月丙午、車駕幸開平

同年六月丁巳、敕諸路造人馬甲及鐵裝具萬二千、輸開平
同年七月癸亥、賑和林饑民○賞鞏昌路總帥汪惟正將校斬渾都海功銀二千五百兩・馬價銀四千九百兩

同年八月甲寅、勅、西京運糧于沙井、北京運糧于魚兒泊、

立檀州驛、頒斗斛權衡、賑桓州饑民

同年九月辛未、置和羅所于開平、以戶部郎中宋紹祖爲提舉和羅官

同年十月庚子、修燕京舊城、命平章政事趙璧・左三部尙書怯烈門率蒙古漢軍駐燕京近郊太行一帶、東至平澤、西控關陝、應有險阻、於附近民內選諸武事者、修立堡寨守禦、又選

銳卒三千、付史樞管領、於燕京近郊屯駐 乙巳、詔指揮副使鄭江、將千人赴開平、指揮使董文炳率善射者千人、由魚兒泊赴行在所、指揮使李伯祐率餘兵屯潮河川 丙辰、詔平章政事塔察兒、率軍士萬人、由古北口西便道赴行在所

⑪ 西涼府附近的戰 元史卷一八〇、耶律希亮傳には

阿里不哥遣大將阿藍荅兒、自和林帥師至焉支山
とい、その戰況について世祖紀には

中統元年九月阿藍荅兒率兵至西涼府、與渾都海軍合、詔諸王合丹・合必赤、與總帥汪良臣等率師對之、丙戌大敗其軍于姑藏(涼州)、斬阿藍荅兒及渾都海、西土悉平
と傳えている。

⑫ 昔木土腦兒の戰 昔木土は同じ元史のうちでも石木溫都(卷

七)、朱木禿(卷一二〇)、失門禿(卷一二・一三二)、昔門禿(一三四)、失畝里禿(卷一三四)などと、いろいろにかかれてゐる。この戰について本紀には

中統二年十一月壬戌、大兵與阿里不哥遇於昔木土腦兒之地、諸王合丹等斬其將合丹火兒赤及其兵三千人、塔察兒與合必赤等復分兵奪擊大破之、追北五十餘里、帝親率諸軍以躡其後、其部將阿脫等降、阿里不哥北遁

といひ、ドーンソンもつぎのように傳えている。

兩軍は1261年(中統二年)の末に戈壁沙漠の南 Khoudia-Bouldac 丘陵と Simoultai 湖(昔木土腦兒)とに近き Altchia Coughour の地に會戦し、アリブカは大敗した。クビライは追撃を禁じた。(中略)ところがアリブカは兄の軍が退却したのを知ると軍をかえし、十日のち Silgulk の丘に近き Sengon Bagoul 地方の Alt とよぶ砂漠の一端で第二回戦を行つた。1262年には、もはやこの方面では戦闘は行われなかつた。(D'Ohsson; Histoire des Mongols. II, p. 351)。

⑬ D'Ohsson; Histoire des Mongols. II, p. 352—5 参照。

このドーンソンの記載をうらづけるものは元史卷一八〇耶律希亮傳である。なお、アリブカとチャガタイ・カーン國との關係については、安部健夫「西ウィグル國史の研究」にも詳しくのべられている(88—75頁参照)。

⑭ アリブカの來降 元史世祖紀によれば

至元年七月庚子、阿里不哥自昔木土之敗、不復能軍、至是與諸王玉龍荅失・阿速帶・昔里給其所謀臣不魯花・忽察・禿滿・阿里察・脫忽思等^{ドーンソンは}來歸、詔諸王皆太祖之裔並釋不問、其謀臣不魯花等皆伏誅

といふ。なお、これについてはドーンソン蒙古史にも詳しく(H. p. 355—8)

The Revolt of Arigbukha

Jitsuzō Tamura

Those nomadic peoples of northern Asia, the Hiung-nu (匈奴) and others, which rose and fell, may be classified into two categories; the nomadic empire which occupied the area north of the Great Wall with Mongolia as their base and the dynasties of conquest whose territory included not only Mongolia and Manchuria but China Proper. The Hiung-nu, the Turks, the Uighurs and the Mongols belong to the former, while Northern Wei (魏) of the T'o-pa (拓拔), Liao (遼) of the Ch'i-tan (Kitay), Chin (金) of the Jurcheng, Yuan (元) of the Mongols and Ch'ing (清) of the Manchus to the latter. Of those enumerated above the Mongol Empire as a nomadic empire and Yuan as a dynasty of conquest were both established by the Mongols, and the latter was nothing but a metamorphosis of the former. When we try to explain the process of this metamorphosis, the revolt of Arigbukha will throw a light on the problem.